

初級第 2 外国語スペイン語授業における練習問題について

村上 陽子

0. はじめに

成績・評価 ←平常点 試験(筆記・口頭) ←授業中／自学習における練習問題の重要性

1. 山口(1991)「スペイン語教材練習問題のタクソノミック分析」

構成 0. はしがき—大学における「スペイン語」について

1. スペイン語の教材について
2. スペイン語教材の練習問題について
3. 文法・構造中心の練習について
4. 文法・構造中心の練習の分類
5. 結語

0. はしがき—大学における「スペイン語」について

大学におけるスペイン語教育の歴史、現在(1991 年当時)のあり方

- ・ 中学・高等学校で行われる英語が語学教育の基礎および中心となっており、スペイン語はこの英語の知識の上に大学において学習するのが一般的であるが、(・・・) いわゆる第二外国語として学ぶ学生の数の方が圧倒的に多い。(p.154)
- ・ 少なくとも「第二外国語」は講義よりも演習中心になってきており、その進度は学習者側に負うところが大きい。学生の習得を容易にしようとして練習を多くすればするほど時間は足りなくなり、授業の進度の設定が困難になる。(p.154)
- ・ スペイン語の場合、学習者はすでに高校までの教育で言語的・知的にはかなり高度レベルに達している。何よりも英語などを通じて「言葉」に関する知識も十分にあることから、入門とはいえ中学時代に経験した英語の学習に比べるとその進度はかなり早く、期間内で教えられる文法的内容は豊富である。にもかかわらず初級クラスでは教材はあくまでも入門のレベルで、語彙の点でも、文構造の点でも単純なものしか使えず、内容的に年齢相応な知的要求に応えられるものを提供することはなかなか難しい。(p.154)
- ・ 日本におけるスペイン語教育は、「学習の困難さ」と「取り扱われる言語素材の幼稚さ」のギャップに悩まされながら、現実の学習目標の設定に取り組んでいるところである。

- ・ 初級クラスにあってもスペイン語教育の基本的な流れは、「講読」と「文法」(それに場合によっては、「会話」が付け加えられる)といえよう。これは多かれ少なかれ文法依存訳読方式に則ったゆえであることは、何もスペイン語だけに限られているわけではなく(…) (p.155)
- ・ 第二外国語としてのスペイン語においても、目標を文章解読に置かざるを得なかった日本の「伝統的リーディング」の枠組みの中にあつて、先に述べた時間の問題から来る効率性、多数の非常勤教員との調整の問題などを解決する方式として、「講読・文法」はそれなりに一定の役割を果たしてきたことは認めざるを得ない(p.155)
- ・ しかし、これでもって語学教育は事足りると考えるのはまずいであろう。国の政策もきわめてオーソドックスなコミュニケーション主体の考え方である。(p.155)
- ・ スペイン語の場合、(…)教育方針として訳読万能主義はなかったと言える。第二外国語においても、特に入門レベルでは、前述のような、「講読」・「文法」の役割分担の明確な区分けをクラス編成に採用せず、同一の教師が(あるいは複数の教師で)全体を統合的に教えていく方式を早くから取り入れたところもある。(…)「講読」と「文法」と別々の教材をもって独立した授業を行う場合、アンバランスは避けられず「講読」にもかなりの解説・文法的説明が要求される。(p.155)

1. スペイン語の教材について

第二外国語入門・初級用としてスペイン語を習得するために利用しうる教材

→ 「有機的構成」の教材:「読み物」の代わりに「対話」 口語体化

文法訳読法を超えるものを目指している。

- ・ Ruiz Tinoco(1986):それぞれの意味機能別の Diálogos をモデルに学習者の発話を促す新しい試みを行っている。本文が学習すべき文法事項のサンプルを含んでいる。
- ・ オーラル・アプローチ系の教材:パターンプラクティスを主体とし、文法・構造の学習を徹底→批判的見方、要素としての取り入れ。
- ・ 多くの教科書が「講読会話+文法説明+練習」やこのバリエーションという構成
- ・ 1991 年当時 今後の課題: 第二外国語のスペイン語教育においても言語活動に重点がいくことが考えられる。そして、コミュニケーションの能力を身につけることを目標に、受動的学習から能動的学習へとさらに移行していくであろう。そうなると、旧来の文法理解・訳読・スペイン語作文などの一連の学習活動は、単純なパターンプラクティス的文法練習の付け加えをも通り越して、文法シラバスの再検討や場面と機能の考えの導入を加えたものに変わっていくこともありえる。(p.156-157)
- ・ しかし、現実的スペイン語学習を顧みるとき、端的にいうなら初級レベルは「動詞の活用に始まり、動詞の活用に終わる」といえる。(…)スペイン語にあつてはオーラルアプローチ的文法体系中心の教え方に問題はがあると認めても、また場面・機能シラバスを考慮することや Spiral Approach の説く反復練習などの必要性に賛成はできても、第二外国語入門レベルの諸条件の許では文法シラバスはかなり有効な方法と思われる。(p.157)

- ・ とまれ、今後の学習が単なる文法項目理解と訳以外の言語活動の練習中心に移行していくことになることが十分に考えられる。(p.157)

2. スペイン語教材の練習問題について

練習問題の分類 (p.160)

1. 西文和訳
 1. 1 Lectura / Diálogo / Ejemplos などをそのまま訳す。
 1. 2 上記の応用文の和訳
 1. 3 語彙の和訳
2. 和文西訳
 2. 1 Lectura / Diálogo / Ejemplos の応用文の訳
 2. 2 語彙の西訳
3. (テーマを定めた)作文・創造
4. 質問の応答
 4. 1 Lectura / Diálogo の内容について答える。
 4. 2 学習したことの応用的質問に答える。
5. 文法・構造中心の練習
 5. 1 代入
 5. 2 変換
 5. 3 付加
 5. 4 統合
 5. 5 定型会話・問答
 5. 6 穴うめ
 5. 7 誤りの訂正
6. 音読・読み上げ・覚える

- ・パタンプラクティス 石崎・Rey(1990) 代入と転換

→ パタンプラクティスを考えていない教材でも、形態・統語的な練習であれば、「代入」「変換」「付加」「統合」などの操作は基本的に適用できるものである。(p.159)

- ・Bolinger et. al(1966)のパタン化した Translation drill 話すことを基本とする

- ・「作文」: 手紙やテーマを与えた文を書かせること。言語能力を自由に使えるという創造性。書く作業を前提にしているがあまり複雑な文でなければ口頭でも言える。

3. 文法・構造中心の練習について / 4. 文法・構造中心の練習の分類

- ・(ここで訳をさせる練習問題を扱わない理由として)和訳の場合、元となる本文の内容と密接に結びついているので、リーディング本来のあり方の根本的な問題や教材の構成上の問題、さらに

具体的な本文の内容の検討をまずする必要がある。(p.160)

・西訳の場合、表現の練習のため役に依存する意義を確認し、学習目標との関連でもとの日本文の妥当性を検討したうえで、可能性があるならもっと体系的に練習問題をアレンジしなければならない。

3. 冠詞

1) [定冠詞・不定冠詞→付加] + 名詞(男性形・女性形／単数形・複数形)

1-1) [定冠詞→付加] + 語尾が a の名詞

1-2) [定冠詞・不定冠詞→穴うめ]

6. 2 再帰動詞

1) 文中 [再帰代名詞→穴うめ]

2) 文中 [再帰動詞→代入]

3) 3人称複数無人称文→se の受身文

4) 文[不定詞→se+3人称単数形]→無人称文

7. 人称代名詞

1) 動詞現在活用形から主格を言う

2) 文中[直接目的語・間接目的語→直接目的格・間接目的格]

3) 文中[直接目的格・間接目的格→西訳]

4) 文中[不定詞+目的語→前置・後置の目的格]

5) 文中[直接目的格・間接目的格→穴うめ]

6) 表の枠うめ

7) 文中[前置詞格→西訳]

8) 間接目的の重複使用文→[a+前置詞格→省略]文

9) gustar 型動詞の文中 {重複間接目的 a+[名詞→代入]}

2. 討論 練習問題について教えてください

・練習問題を授業中にしますか 宿題にしますか

→参加者の大半が授業中に理解の確認のために解かせ、宿題にも出す。

・どんなタイプの練習問題をよく使用しますか

→「オーソックスな」文法練習問題。教科書付随のものや、練習問題集からという声が多かった。

・解答はどうしていますか

→授業中に答え合わせ。かなり多くの時間がかかるのが問題点であるとの意見。

・何のために練習問題をしますか

→理解度の向上のため。自主学習促進のため。

3. 実習 練習問題を解いて考えよう

・p.160 の分類のどれにあてはまるか

・何を練習しているか

・その問題が答えられるようになると何ができるようになるか

→ いくつかの教科書(日本で出版されたもの、スペインで出版されたもの)から練習問題を取り出したプリントを配布し、参加者で解答。同じ文法項目を扱ったものでも、難易度で段階付けを考えるとよい、文法練習であっても、文脈のある練習問題の採用についてコメントがある。

4. おわりに

・学習目標と練習・評価について

第二外国語のスペイン語教育においても言語活動に重点がいくことが考えられる。そして、コミュニケーションの能力を身につけることを目標に、受動的学習から能動的学習へとさらに移行していくであろう。そうすると、旧来の文法理解・訳読・スペイン語作文などの一連の学習活動は、単純なパタンプラクティスの文法練習の付け加えをも通り越して、文法シラバスの再検討や場面と機能の考えの導入を加えたものにも変わっていくこともありえる。(p.156-157)

とまれ、今後の学習が単なる文法項目理解と訳以外の言語活動の練習中心に移行していくことになることが十分に考えられる。(p.157)

→ まだまだ過渡期？何を学ばせるかという目標設定なくしては、練習問題はおろか、シラバスさえも設定できない。

・動詞、動詞、動詞… 初級文法授業に占める動詞に関連する項目の多さ。